

研究仮説

1. 子どもの自己観に保護者が与える影響

子どもの自己観の発達には、人的学習環境である教師・保護者などが単に学習方略を教えたり、学習環境を整えるだけでなく、子どもを受容したり子どもの学習意欲を支援することが必要である。この点について、保護者には「学習環境（親の関わり）からの影響」（関与・評価・課題・自律支援の4要因）について調査し、子どもの「学習観」（学習目標志向性・遂行目標志向性）、「自己観」（有能感・自己決定感）への影響や、学習行動自体への影響を分析することにした。

2. 子ども自身の学習観が、学習環境への働きかけに関する意識・行動に及ぼす影響

子どもの学校外学習では、完全な「一人学び」だけでなく、学習環境としての人・物に援助や情報を求める場合が多く、そうしなければ学習がなかなか進まなかったり、深まらなかったりする。このとき、援助（相談など）・情報を求める行動に影響を与えるのは、そのような行動への子どもの価値観であると考えられる。

援助を求める行動に「得」があると考えられる背景には子どもの学習観である「学習目標志向性」が、また、「損」だと考える背景には「遂行目標志向性」が影響していると考えられる。

3. 子どもの学習観・自己観が学習への動機づけに与える影響

子どもの学習意欲に、子どもの学習観・自己観が及ぼす影響について分析する。

4. 学習に対する意識・行動の発達差・性差

上記の内容について、小・中学生間での発達差や性差の有無を分析する。

本研究における仮説構造モデル

